

たか やなぎ けん じ ろう
高柳健次郎

善悪・正邪を検証する科学的な鏡がほしい
— テレビジョン技術の父 —



高柳健次郎 (1899 ~ 1990)
 出典：『静岡大学テレビジョン技術史』

■ **生い立ち**

高柳健次郎は、1899(明治32)年、静岡県浜名郡和田村(現:浜松市東区安新町)に高柳太作とみつの長男として生まれる。幼い頃は病弱で勉強も運動も苦手だったが、苦手な算数と理科も恩師のおかげで好きになり、やがて教師になることを夢に勉学に励んだ。

高柳は、静岡師範学校(現:静岡大学教育学部)に進み、物理学、特に電子による蛍光発光に強い興味を持った高柳東京高等工業学校(現:東京工業大学)に進学した。高柳は、1921(大正10)年に卒業すると教師への道を選んだ。

■ **テレビジョン研究へ**

1924(大正13)年、新設直後の浜松高等工業学校(現:静岡大学工学部)の助教授となった高柳健次郎は学校にテレビジョンの研究をしたいと申し出た。驚かれながらも学校側は研究準備を整えてくれた。ここで「無線遠視法」(高柳健次郎が

名づけたテレビジョンのこと)の研究が始まった。

高柳は、苦勞の末、1926(大正15)年12月25日の夜、世界ではじめてニポー円板による撮像とブラウン管表示で「イ」の文字を映し出すことに成功した。しかし、高柳は、機械方式の限界を見抜き、全電子方式に挑戦し、1930(昭和5)年、テレビ撮像管を発明した。

この頃、テレビジョンの将来性に期待が高まり、1940年に予定されていた東京五輪をテレビ放送するという計画が国家事業として取り上げられ、研究が加速された。



天覧時のニポー円盤送像機 (1930) 写真: 高柳記念館蔵

高柳は1927年、浜松高等工業学校教授のまま、NHK技術研究所に向向し、日本のテレビ技術開発の中心となり、1928年には現在のテレビ規格に近い走査線数441本、毎秒25枚の技術を完成させた。その後、第2次世界大戦の勃発でテレビジョンの研究は中断された。

■ **VTRへの発展**

戦後、高柳健治郎はテレビジョンの研究を進めるために、1946(昭和21)年、日本ビクター(株)に入社し、テレビジョンの技術革新とテレビ放送の実用化に尽力した。1949(昭和24)年にはテレビジョンの放送が始まり、1960(昭和35)年にはカラーテレビの放送も始まる。この間、高柳は日本のテレビ開発、テレビ産業技術の指導者として活躍した。

1959(昭和34)年には世界に先駆けて、2ヘッド方式のビデオテープレコーダーを完成させ、ホームビデオの世界的普及とVTR産業の発展に貢献した。このように、高柳健治郎はテレビジョンに関する技術の礎を築き、さらに、テレビ産業として発展する技術の指導者として大きな役割を果たした。



受像用のブラウン管
 写真: 筆者撮影

(漢人省三)